

第32回全国養鱒技術協議会が静岡で開催されました

第32回全国養鱒技術協議会が7月5、6日に静岡市のグランシップで開催され、全国23都県の試験研究機関、水産庁、大学、養鱒業者、飼料や医薬品メーカーら約100人が参加しました。



写真1 開会式

今回の中心課題は「一層のコスト削減を考える」であり、そのテーマに沿った3題の講演がありました。

まず、日本養魚飼料協会の豊田理事から「養魚飼料の現状と代替原料」として、マス類配合飼料に55%ほどの魚粉が使用されている現状が示され、魚粉価格の高騰により、代替原料としていかに魚粉を削減した飼料を作るかが重要との話がありました。動物タンパク原料の条件は、粗タンパク質が50%以上で、量が安定しており、乾燥できて安価なものということでした。いろいろな代替原料を組み合わせて、少しずつ魚粉を置き換えていくことが有効であり、養殖魚種により原料ごとに特徴があるそうです。また、代替飼料の内容に合わせた生産パターンを考えることが重要とのことでした。

次に、東京海洋大学大学院の舞田教授から、「飼育管理の改善によるコストの削減」について講演をいただきました。内容は養魚全般のコストは、半分以上が餌代であること、歩留まりと飼料効率では、歩留まりの方が収支に大きな影響を与えること、飼育密度が歩留まりに影響し、その原因は溶存酸素量の低下や、餌が十分に行き渡らないことによる魚体の抵抗力の低下によるところが大きい



写真2 表彰式



写真3 先生による講演

いことなどでした。生産記録を作り、コストの計算をすることにより、適切な飼育管理を行うことが重要であるとのことでした。

最後に、北海道大学大学院の吉水教授から「魚病対策によるコストの削減」について講演をいただきました。IHNを例として、病気の発生を前提とした飼育が病原性を強くし、被害を増加させていること、受精前の洗卵、受精後と発眼期の卵消毒が重要であり、洗卵した水は消毒してから排水するべきであるとのことでした。用水、排水の殺菌についても悪循環を断ち切るために重要であるとのことでした。また、ワクチンの実用化に向けての取り組みや防疫体制についても話がありました。

今回はポスターセッションによる研究発表がありました。これは、全国的に養鱒担当の研究者が減少している中で、お互いの情報を提供し、若い研究者により多くの発言や討論の場を提供することを目的として行われたものです。今回は、品質保持やブランド化、魚病対策などに関する9課題の事例が紹介され、発表者とポスターの周りを取り囲む人たちの間で、熱心な意見交換が行われました。



写真4 ポスターセッション

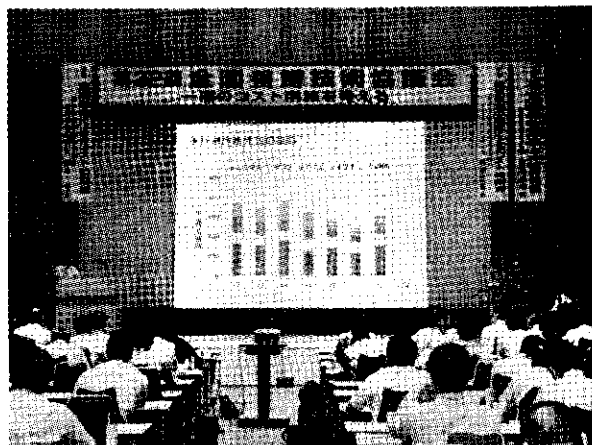


写真5 疾病実態調査報告

協議会2日目には、研究報告として「疾病実態調査からみた養殖サケ科魚類の疾病問題」について、静岡県の青島主査から発表がありました。これは、養鱒技術協議会で行っている疾病実態調査の25年間の魚病診断件数をまとめたものです。



写真6 研究発表

診断件数としては横ばい又は減少傾向にあるものの、混合感染が増加し、大型魚で被害が増加しているそうです。これらの問題を深刻にしているのは、IHN、ヘルペスウイルス病、レンサ球菌症、冷水病であり、これらの疾病の対策を早急に確立する必要があるとのことでした。

その他、研究部会報告、21世紀の養鱒を育てる会の活動報告、全国養鱒技術協議会総会が行われ、全国養鱒技術協議会は無事終了しました。

(鈴木基生)

河津川でサケが採捕されました

10月29日に河津川下流でサケらしき魚が死んでいるとの連絡があり、河津川漁協で引き上げました。査定（上あごの歯の形、鰓の内側のトゲの数など）の結果、やはりサケ（シロザケ）で、迷って河津川に遡上したものと思われます（写真7）。このサケは数日前から確認されており、生きていたときには体色はもっと青かったそうです。河津川には時々サケの迷入があるらしいのですが、通常は12月や1月で10月中に迷入するのは珍しいとのことでした。



写真7 採捕されたサケ

全長65cm、体重2424gの立派な雌で、腹中にはいくら（卵）が詰まっていたが、卵は過熟ですでに吸水していました。平均卵重は315mgで1,800粒が確認できました。一般にサケは3,000粒程度の卵を持つといわれていることから、

半分くらいは死んでから流出してしまったものと考えられます。また、鱗を調べたところ、満4歳と推定され、通常の回帰年齢に達していました（写真8）。

せっかく4年間も成長したのに、生まれた川をまちがえて遡上してしまい、雄もいないため産卵もできず、一生を終えてしまった悲しい運命をたどった魚を見てかわいそうに感じました。

（中村永介）

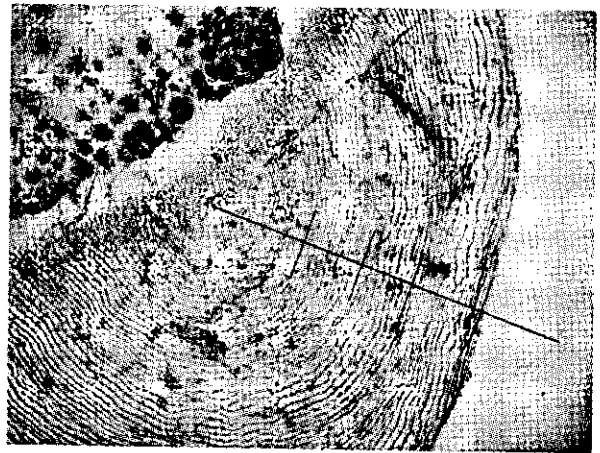


写真8 鱗紋と年輪区分

県民の日イベントを開催しました



写真9 県民の日

8月21日（火）、県民の日イベントとして「富士山麓の親子ニジマスふれあい体験教室」を開催しました。

当日は天候にも恵まれ、親子21組52名が参加し、ニジマスの給餌体験や採卵・受精デモ、タッチプールでのふれあい体験などを体験してもらいました。普段あまりできない体験とあって、大人から子供まで感嘆の声を上げていました。

（岡田裕史）

富士養鱒場の湧水と気象

| 月 | 天 候 (午前9時、日数) | | | | 降水量 (mm) カッコは降水日数 | | 湧水量 (万トン/日) | |
|----|---------------|----|----|----|----------------------|---------|-------------|-------|
| | 快晴 | 晴れ | 曇り | 雨 | 19年 | 20年平均 | 19年 | 20年平均 |
| 7月 | 0 | 4 | 17 | 10 | 526(22) | 288(13) | 71.5 | 58.4 |
| 8月 | 1 | 13 | 11 | 6 | 93(10) | 311(12) | 64.5 | 72.1 |
| 9月 | 1 | 10 | 9 | 10 | 398(16) | 449(13) | 59.6 | 91.1 |

日 誌

| | |
|---|--|
| <p>7月4日 全国養鱒技術協運営委員会 (静岡市)</p> <p>5日 全国養鱒技術協議会 (静岡市, ~6日)</p> <p>7日 内水面漁連組合長会議 (静岡市)</p> <p>8日 静岡県あゆ友釣選手権大会 (静岡市)</p> <p>13日 青年漁業士役員会 (県庁)</p> <p>19日 普及体制打合せ (沼津市)</p> <p>20日 県民のこえ研修 (沼津市)</p> <p>24日 マダイ中間育成場カサゴ駆除(沼津市) 海況観測 (沼津市)</p> <p>27日 人体寄生虫検査研修 (東京)</p> <p>8月1日 アユ資源研究打合せ (裾野市)</p> <p>9日 研究運営会議 (本所)</p> <p>13日 後継者対策調査アンケート(富士宮市)</p> <p>14日 低酸素情報調査 (沼津市)</p> <p>15日 富士宮市立富士根北中学校3名来場</p> <p>21日 県民の日イベント開催</p> <p>23日 静岡県立大学佐藤先生来場</p> <p>28日 海況観測 (沼津市) アユ海域調査現地視察</p> | <p>浙江省報道関係者来場</p> <p>29日 技術連絡協議会 (場内)</p> <p>30日 アマゴ資源量調査 (南伊豆町)</p> <p>9月1日 防災訓練</p> <p>4日 普及体制打合せ (沼津市)</p> <p>6日 全国湖沼河川養殖研究会 (~7日, 栃木)</p> <p>7日 中部地区漁業士と行政の意見交換会 (本所)</p> <p>11日 低酸素調査 (沼津市)</p> <p>19日 ニジマス鮮度調査 (富士養鱒漁協)</p> <p>26日 魚病学会 (~30日, 函館市) 医薬品監視員視察 (富士宮市) 山梨水技忍野支所長来場 ニジマス鮮度調査 (富士養鱒漁協)</p> <p>27日 富士宮市立富士見小学校114名見学 漁業高等学園9名見学</p> <p>28日 県民のこえ研修 (富士市)</p> |
|---|--|